

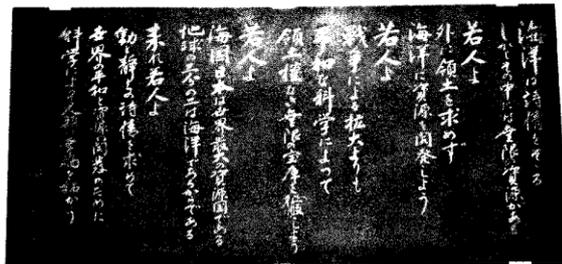
# こころの五手箱



〈海洋は詩情をそゝる〉  
 海洋学部が発足した。わが国初で唯一の学部である。海洋学とは、自然科学のみならず人文・社会科学を含み、海洋に関する学際的な研究をする学問だ。海に囲まれた島国日本だからこそ、こゝろした学問が必要である。と重義は考えた。1962年、東海大学に

〈海洋は詩情をそゝる〉の銘板

## 海の平和を目指して船出



詩は海洋学部の理念をうたっている

海洋は詩情をそゝる  
 若人よ 外に領土を求めず  
 海洋に資源を開発しよう  
 東海大学の清水キャンパスの校舎に、こんな詩が刻まれた銘板がある。私の父で本学の創立者である松前重義が書いたものだ。1962年、東海大学に

海洋は詩情をそゝる  
 若人よ 外に領土を求めず  
 海洋に資源を開発しよう  
 東海大学の清水キャンパスの校舎に、こんな詩が刻まれた銘板がある。私の父で本学の創立者である松前重義が書いたものだ。1962年、東海大学に

まつまえ・たつろう 1927年長崎生まれ。50年東北大工卒。同大文部教官、電気通信研究所を経て、63年東海大教授。87年より東海大学長などを歴任。77、2001年参院議員。91年より現職(2014年まで理事長を兼任)。著書に「ある日のヨーロッパ」「私の20世紀」など。

のだ」という主張が通って、ことを痛感したのだ。認可に至ったが、臆病風が、学部ができるまで海を調査の気風と創造性を阻む

研究、学生の教育・研修や国際活動などを行う調査研修船が必要となつた。私の専門は金属工学で造船は全くの門外漢だったが、新しい調査船の基本設計会議に参加した。教員や実習担当者らの要望などを調整し、68年に就航したのが「東海大学丸二世」と命名した新造船であった。

その後歴代の調査研修船で行ってきた研修航海のなかで、最も印象に残っているのが「日本海を平和な海に

しよつ」と願いを込めて行った89年のウラジオストク親善訪問だ。

ウラジオストクは当時ソ連の軍港で日本の船は入港できなかった。私は、科学アカデミーを通じて粘り強く交渉を重ね、やっと特別に許可を得た。空母や情報収集艦、ミサイル巡洋艦や潜水艦などが並んだ金角湾に緊張のうちに入港し大歓迎を受けたことを覚えてい

る。入港許可の電報は科学アカデミーからで「學術調査船のウラジオストク入港は肯定的に解決された」という電文だった。

世界に広がり多くの国に接している海洋を、平和的に共有し活用していくことは人類共通の課題である。その思いを未来に引き継いでいくことも海洋学部の大きな使命だと考えている。

2017年(平成29年)年7月3日(月)  
 日本経済新聞(夕刊)14面「夕刊文化」

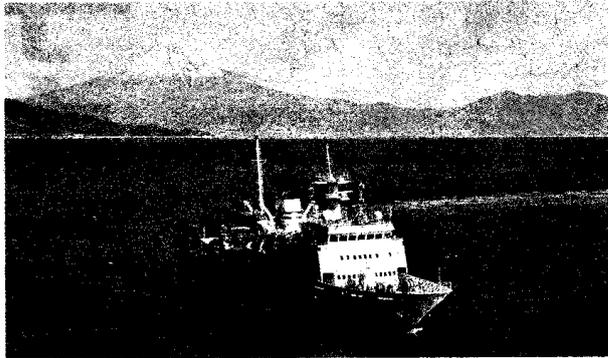
# こころの玉手箱

東海大学総長

松前 達郎

2

望星丸



国際的な行事にも活用できるハイテク船だ

懸け橋となつてい  
る施設である。重  
義は、生前センタ  
ーを訪ねるたび  
に、眼前に広がる  
海を見つめながら  
「世界平和を願う  
本学の船を東海大  
学ゆかりの地デン  
マークの海に走ら  
せたい」と語って  
いた。  
東京港を出港  
後、バンクーバー、  
サンディエゴに寄

1993年、東海大学は  
建学50周年記念事業とし  
て、古くなった2隻の海洋  
調査研修船を廃船にして新  
鋭船を建造した。私はこれ  
を「望星丸」と命名した。  
2174国際総士の第1  
種船。調査船でありながら  
旅客船でもあり、学生の海  
外研修航海・海洋実習のほ  
か、国際的な行事にも活用  
できるハイテク船である。  
96年6月、この新造船望  
星丸でデンマークを訪ねる  
世界一周航海に出た。  
私の父で本学の創立者松  
前重義は、若き日にデンマ  
ークを訪ね、国民高等学校  
による教育の現状を学ん  
だ。かの国の教育による民  
主主義形成の歴史が、本学  
建学の精神の源泉となつて  
いるのである。  
そしてそのデンマークに  
は本学が70年に開設した  
「東海大学ヨーロッパ学術  
センター」がある。今に至  
るまでヨーロッパと本学の

## 世界一周、ゆかりの地へ

港したのち、パナマ運河を  
通過してモンテゴ・ベイ(ジ  
ヤマイカ)から大西洋を横  
断、8月21日、目的地のコ  
ペンハーゲン港に入港し  
た。  
ヨーロッパ学術センター  
の日本庭園には創立者の記  
念碑があるが、同月25日の  
創立者の命日には教職員や  
関係者による望星丸入港の  
報告が行われた。  
帰国の航海はバルト海と  
北海を結ぶキール運河やギ  
リシャのコリントス運河、  
更に砂漠の中に造られたス  
エズ運河を通り、シンガポ  
ールに入港。次の寄港地パ  
ンコクではプミポン国王在  
位50年の祝賀会やタイ国王  
室のシリントーン王女の望  
星丸訪問があり、127日  
間、4万3800キの大航  
海を終えて無事帰国した。  
この航海を通じ、教職員  
と学生たちは海洋がいかに  
文明社会に重要な役割を果  
たしているかを再認識でき  
たのではないか。東海大学  
海洋学部「海洋文明学科」  
がある理由もそこにある。

2017年(平成29年)年7月4日(火)

日本経済新聞(夕刊)14面「夕刊文化」

2/5

# こころの玉手箱

東海大学総長

松前 達郎

3

松島



学生時代にヨットで遭難しかけ、自然に対する観念が変わった

翻弄されヨットに海水が流れ込んできた。帆を下ろせば船体はいくらか安定するが、ヨットは沖に流されてしまう。湾内に向かって必死に帆を操り、タッキング（船首を風上に向けるところ）を繰り返す。

東海大学は私学でありながら実習・調査や研究を行う船舶を所有している大学である。私は海洋調査研修船建造につながる多くの出来事を経験してきたが、東北大学工学部の学生だったときの苦い思い出がある。ある秋の日、友人に誘われヨットで松島に出かけようという話になった。当時、東北大学のヨットはディンギー（キャビンを持たない小型のもの）だった。

その日は前日からの雨があがっていた。午前中は順風で、出港して1時間ほどたっただろうか。やがて風が弱くなり引き返すのにも時間がかかるだろうと考え、帰途につくことにした。入り江を出て、湾の中央にさしかかった時だ。突然陸からの強い突風にあおられ、私たちのヨットはあやうく転覆しそうになった。いくら変わりやすいといっても、天気がこれほど急変するとは思っていなかった。いやな予感がした。

## 危機一髪 海に畏敬の念

返しても次第に湾外に流されている。外海を見ると白く崩れる荒波が次第に大きくなってくるではないか。これは本当にまずいことになったと思っていたとき、港の奥からタケボートがやってきた。荒波にもまねながら何とか乗り移り、助かったと胸をなで下ろした。ヨットはすでに横転していた。私たちが大学生と知った船長は「あなたがたはまだまだ経験が少ない。あのまま放っておくと外海へ流されてやっかいなことになるところだった。海は午後になると陸から強い西風が吹く。ヨットに乗る以上は気象の勉強が必要だ」と言いながらヨットに牽引ロープを結んでいた。

私は海の男のたたずまいに畏敬の念をおぼえた。この経験は、その後の私の自然に対する観念を変え、海に対する危機管理のあり方を示唆してくれた。東海大学海洋科学博物館に津波発生時の動く展示を置いたのもその一例である。

2017年（平成29年）年7月5日（水）

日本経済新聞（夕刊）14面「夕刊文化」

3/5

# こころの玉手箱

東海大学総長

松前 達郎

4

東海大学の建学の母胎は北欧デンマークの国民高等学校を範とする望星学塾という私塾である。

私の父、松前重義が、武蔵野市にある自宅の庭に設けた建物で1936年に始めた。電気通信関連の技術者たちが集い、研鑽し合った場である。科学技術庁の初代事務次官を務めた篠原登氏や、のちに日本電気(NEC)の社長になる小林宏治氏らそうそうたる顔ぶれが集まっていた。

この私塾は、重義が中心となって研究した「無装荷ケーブル通信方式」という技術の発明に対し、電気学

会から贈られた奨学金をもとに創設されたものだ。無装荷ケーブル通信とはエレクトロニクスにより、簡素な構造で高音質・長距離・多重通信を実現する電話通信を可能にしたわが国独自の新しい技術。塾生はその開発メンバーである。

塾のことは当時小学生だった私も覚えている。毎朝曜日に塾生たちが集まってくる。午前中に研究会があり、ウイークデーの夜にはデンマーク体操という体育が行われ、私も参加させられた。時々柔道の稽古もあって、子供の私はもっぱら投げられ役。おかげで受け

た私塾は、重義が中心となって研究した「無装荷ケーブル通信方式」という技術の発明に対し、電気学



無装荷ケーブル

「無装荷ケーブル通信方式」の発明に贈られた奨学金をもとに望星学塾は創設された

## 技術者育む私塾につながる

身だけはうまくできるようになった。

この塾は、技術者同士が信頼関係を結び、人間としての総合力を高めることを目的としていた。そこには重義が塾生に説いた4つの言葉が残っている。

〈若き日に汝の思想を培え／若き日に汝の体軀を養え／若き日に汝の智能を磨け／若き日に汝の希望を星につなげ〉

重義が教育に情熱を注いだのは、師と仰いでいた内村鑑三の「デンマーク国の話」に感銘を受け、デンマークの歴史を学んだからである。農業国デンマークは19世紀以降いくたびも戦いに敗れて豊かな国土を失った。国の存立が危ぶまれ、国民は悲嘆のどん底に追い込まれた。だが国民高等学校の教育などを通じた農民の意識改革で復興した歴史がある。

重義はデンマークを訪ね、その歴史と実践を学んだ。望星学塾にはその思想が流れているのである。

2017年(平成29年)年7月6日(木)

日本経済新聞(夕刊)14面「夕刊文化」

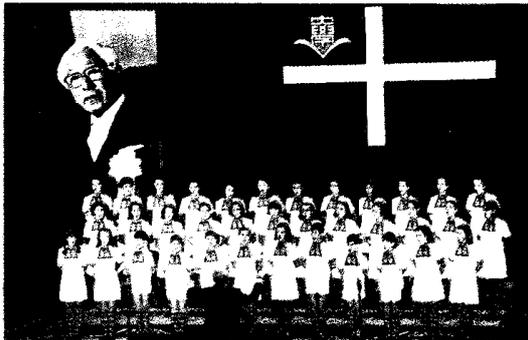
4/5

# こころの玉手箱

東海大学総長

松前 達郎

5



ブルガリアの少年少女合唱団

心癒やす歌声が国を越えた信頼  
関係の大切さを教えてくれた

日本初公演は67年。この時は全国で40回の公演を行った。以来、2007年まで、計18回来日し、その澄んだ歌声を私たちに届けてくれた。私は民間外交の重要性を痛切に感じてきた。政治体制がいかに変化しても、人と人の心

心洗われるような清らかな歌声が会場に流れていた。1999年11月1日、東海大学の湘南校舎の大ホール。建学57周年記念式典で、ブルガリア国立ラジオ放送局ソフィア少年少女合唱団が「建学の歌」を歌ってくれた。合唱団は本学などの招きで来日し、付属高校のある場所を中心に全国各地でコンサートを開いた。東海大学はブルガリアと関係が深い。創立者松前重義は66年に日本対外文化協会を招へいた。当時わが国との関係が薄かった旧ソ連および東欧諸国との学術・教育・文化の民間交流を推進することが目的だった。重義はブルガリアのソフィアに初めて滞在したとき、そこで聴いた合唱団の歌声に魅せられた。「これまで私が聴いたあらゆる子供の合唱に比べて最も上手に思えた」と語ったのも当然だろう。直ちにブルガリア政府に掛け合い、合唱団を招へいた。

## 歌声は心の絆を築く

国を越えた信頼関係をどう築いていくか。真の信頼関係は人の心の絆であり、政治のかけひきで作られたものではない。私たちは深く考えなくてはならない。私は合唱団の清らかな歌声を聴くたびに、心が洗われるのを感じる。2006年夏には、ソフィア少年少女合唱団の創立者ネジャルコフ氏の招きに応え、黒海のクラネヴォで合宿中の合唱団を訪問し、親交を深めた。ネジャルコフ氏は13年に逝去されたが、彼の魂は合唱団の歌声と共に今日もお私のこころの玉手箱のなかで生きている。

2017年(平成29年)年7月7日(金)

日本経済新聞(夕刊)14面「夕刊文化」

5/5